

# 初対面相手に対するパーソナル・テリトリーへの言及 —日本語母語話者と韓国人日本語学習者の 意見述べの会話を通して—

許 明子

## 要 旨

本研究は、韓国人日本語学習者が聞き手のパーソナル・テリトリーの内容にどのように言及するかを明らかにするために、同年代初対面の日本語母語話者と対面で行った会話に見られる発話内容を分析したものである。初対面の両者が与えられたテーマについて意見交換を行う会話で、相手のパーソナル・テリトリーに踏み込む内容について言及するか否か、言及する場合はどのように言及するかに関する分析を行った。

その結果、日本語母語話者より韓国人学習者のほうがパーソナル・テリトリーに関わる内容に言及する頻度が高く、積極的に質問する場面が多く見られた。一方、日本語母語話者は質問されたことに答えてはいるものの、パーソナル・テリトリーは敬遠しながら会話を進めていることが明らかになった。

【キーワード】 パーソナル・テリトリー 言及 同年代初対面 意見述べ

Reference to the Personal Territory of a Partner is  
First-encounter Conversations : opinions expresses in the  
conversation of a Japanese native speaker and a Korean  
learner of Japanese Language.

HEO Myeongja

【Abstract】 To further validate previous studies about reference to the personal territory of a Korean learner of Japanese language, who analyzed a first encounter conversation with a Japanese native speaker of the same age, and the contents of the utterances seen in the conversation. In the conversation, where participants exchanged opinions regarding the theme given to both, analysis examined whether or not personal content referring to the personal territory of the partner appeared, and if so how this was accomplished.

Therefore, compared to the Japanese native speaker, the reference accuracy of the Korean learner of Japanese language regarding the content related to the personal territory was high, instances of active questioning were observed. On the other hand, although the Japanese speaker answered the questions asked, it became clear that reference to personal territory was avoided in the conversation.

【Keywords】 Personal Territory, Reference, First encounter conversation, Opinion

## 1. はじめに

近年、日本語を媒介言語とした日本語母語話者と外国人学習者の異文化接触場面は日本の国内外で急増している(尾崎1998)。グローバル化が進んでいる昨今、日本語を媒介言語としたコミュニケーション活動がさらに活発に行われてきており、日本語教育の現場においても異文化の理解、接触場面におけるコミュニケーション活動について取り上げる必要があると言える。本研究では、初対面の日本語母語話者と韓国人日本語学習者(以下、韓国人学習者)が自分の意見を述べる場面において、どのような内容について発話するかについて分析し、両者のコミュニケーション・スタイルの理解と、日本語教育現場への応用について検討することを目的とする。

許(2011)では、日本人、韓国人、中国人が上下関係もしくは親疎関係が明らかな相手に対して、パーソナル・テリトリーに踏み込む言及をするか否かについて調査を行い、3か国の異同について分析を行った。その結果、日韓中の3か国にはパーソナル・テリトリーの内容に言及しやすい項目と言及しにくい項目があり、パーソナル・テリトリーの段階性にも相違点が存在していることを指摘している。

さらに、許(2015)では韓国人学習者の場合、相手が先生のような目上や初対面の場合でも、外見について言及する割合が高く、日本及び中国とは異なる傾向があると述べられている。韓国人学習者のアンケートからは、相手の外見についてほめる内容であれば目上の相手でも初対面の相手でも言及するという記述が見られ、挨拶代わりに外見について言及している可能性が指摘されている。

本研究では韓国人学習者が初対面の日本語母語話者と日本語を媒介言語としてコミュニケーションを行う場面で、パーソナル・テリトリーの内容についてどこまで言及しているか、またどのような内容について言及しているのかについて分析を行う。その分析結果に基づいて、コミュニケーションの場面で起こりうる問題点について考察する。

## 2. パーソナル・テリトリーと発話内容

本章では、パーソナル・テリトリーと関連して、コミュニケーションの場面における敬語の使い方の自然さ、聞き手に対する丁寧さに関連する先行研究を概観する。角田(1991、2009)の「所有傾斜」、鈴木(1997)の「私的領域」、許(2011、2015)の「パーソナル・テリトリー」の3つの概念について概観し、日本語によるコミュニケーションの場面で起こりうる問題点を中心に述べる。

### 2.1 所有傾斜

角田(2009:127)では、一般に敬語の表現の自然さ、適格さには次の5つの要素、(i)伝達手段は話し言葉か書き言葉か、(ii)どんな文体か、(iii)被尊敬者は聞き手か第三者か、

(iv) 話し手の性、年齢、社会階層、(v) 被尊敬者の社会的地位、が関係していると述べている。これらの要素は、被尊敬者の所有物に対する敬語の自然さにも影響を与えると述べている。

所有者の敬語の自然さには所有物の種類によって以下のような傾斜が存在しており、所有者敬語の自然さに影響するとしている。

(1) 「所有傾斜」(角田2009:127)

身体部分>属性>衣類>(親類)>愛玩動物  
>作品>その他の所有物

所有者の身体部分は最も傾斜の高いものであり、敬語を使った場合、その自然さも高くなる。次いで所有者の属性、衣類、愛玩動物、作文、その他の所有物の順に敬語の表現の自然さが異なっており、これらの所有物が段階的に存在していると指摘されている。所有傾斜は第三者の所有物について敬語を使って表現する際の自然さ判断の指針を示しているものであり、敬語表現の使い方において重要な概念であると言える。

しかし、コミュニケーションの場面で、敬語を使う対象が聞き手であったり、聞き手の所有物であったりする場合は、所有傾斜が高いものであっても敬語表現が不自然になる場合がある。例えば、目上の人聞き手である場合、相手の所有傾斜が最も高い身体部分について述べる際は敬語を使うべきであるが、その敬語表現は自然だと判断できるのだろうか。日本語の場合、身体部分は個人の固有のものであり言及しにくく、敬遠されやすいものである。聞き手が目上の場合、所有物について言及するときに敬語を使ったとしても、場合によっては相手を不愉快にさせたり、誤解を招いたりする恐れがある。

したがって、聞き手の所有物について言及する際には、敬語表現の自然さだけでなく、言及する内容や話し手と聞き手の関係やコミュニケーションを行う場面も考慮する必要がある。日本語の文法的な正しさとコミュニケーション上の自然さは、敬語を使う対象や場面によって異なると言える。

次節で取り上げる鈴木(1997)では、日本語の丁寧体を使う相手に対する丁寧さについて、私的領域の概念から分析を行っている。

## 2.2 聞き手の私的領域

鈴木(1997:45)によると、丁寧さは「話し手が聞き手と友好的な関係を維持するための配慮」であるとし、そのために文型の運用場面で制限が生じることがあると述べている。日本語の丁寧体世界では、様々な言語行動の場面で「聞き手の判断・決定の権利を侵害してはならない」といった丁寧さに関する規則があり、依頼や贈答、報告などの言語行動の

場面によって適切な表現が異なってくるという。日本語によるコミュニケーションの場面で丁寧さを表すためには、各言語行動に適切な表現や文型及び語彙を選ぶことが必要である。また、聞き手に対して「何を言うか、何を言うべきでないか」の発話内容を選択することも重要であると言える。

以上について鈴木 (1997 : 57) は「丁寧体世界では、＜聞き手の領域＞と＜話し手の領域＞がはっきりと区別されており、丁寧体世界において丁寧さを保つためには＜聞き手の領域＞に踏み込むことを避け、＜聞き手の領域＞に言及する場合に、＜中立の領域＞や＜話し手の領域＞について述べる形を使うなどの配慮が行われる」と述べている。さらに、以上のことを踏まえて「丁寧体世界において、丁寧さを保つためには＜聞き手の領域＞の中心にある《聞き手の私的領域》にかかわる発話は回避しなければならない」と述べ、発話の内容が丁寧さに深く関わっていると述べている。丁寧さに関わる発話内容について以下の図1のように、文法的な制限の度合いを段階的に示している (鈴木1997 : 62)。

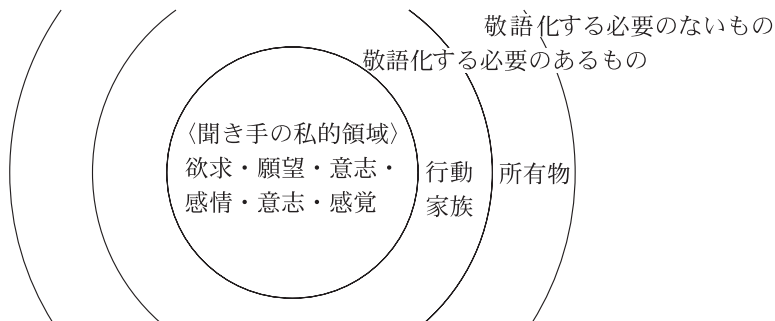


図1 <聞き手の領域>に関する制限の段階性

丁寧体を使用する相手に対して丁寧さを保つためには、《聞き手の私的領域》の内容は言及を避けなければならない。《聞き手の私的領域》に含まれている聞き手の欲求、願望、意志、感情、感覚の内容について言及したり踏み込んだりすると、丁寧体世界においては不適格な表現となる。また、「行動、家族、所有物」などについて言及する際には敬語化が必要であり、文法的な制限がかかる。

しかし、しばしば韓国人学習者の場合、丁寧体を使うべき相手に対して《聞き手の私的領域》に踏み込んだ発話をする 경우가あり、丁寧さが損なわれたり、無礼な印象を与えたりする場合がある (許2010b)。韓国人学習者の立場からすれば、親近感を示し、相手との距離を縮めるためのストラテジーとして聞き手の領域のものについて言及したり踏み込んだ発話をしたりすることがある (許2009)。このように、《聞き手の私的領域》に関する認識が異なっている場合、韓国人学習者と日本語母語話者との接触場面で誤解が生じ、摩擦を引き起こす可能性があると思われる。したがって、日本語教育の現場では、敬語の表

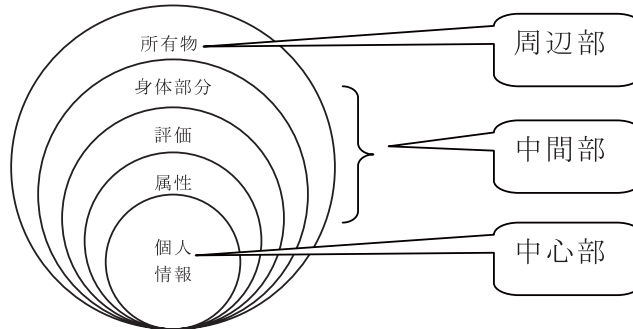
現について文法的な知識を教えるだけではなく、敬語を使って丁寧に表現するためには、どのような内容について言及したらいいのか、言及してはいけないのかについても指導が必要である。

許 (2010a, 2010b, 2011, 2015) では個人にはパーソナル・テリトリーが存在し、話し手と聞き手の間のコミュニケーション活動で重要な概念であると述べている。つまり、丁寧さを保つためには、話し手の領域 (テリトリー) と聞き手の領域があることを認識し、言及する内容についても認識を持つことが重要であると述べている。次節で許 (2015) を中心に考察する。

### 2.3 聞き手のパーソナル・テリトリー

許 (2011) では話し手が聞き手に対して、丁寧さを保ちながら円滑なコミュニケーションを遂行するためには、敬語表現の適切な使用だけではなく、聞き手に対する話し手の発話の内容も重要であると指摘している。聞き手の所有物及び聞き手のテリトリーに属するものには、敬語を使って丁寧に表現することができるものと、敬語を使って表現しても言及することによって丁寧さが失われるものがあると述べている。

そのような個人の私的な領域を表すものとして、「パーソナル・テリトリー」があるとしており、図2のように、中心部から周辺部へと段階的に存在していると述べている (許 2011 : 5)。



関わる内容とコミュニケーション上の関係については、目上の人や親しくない相手に対しては、中心部にある内容は言及を避けるべきであり、中間部や周辺部へのものについて言及する際には丁寧さを表すために何等かの言語的な措置を施す必要がある。

さらに、許 (2015) では日本、韓国、中国のパーソナル・テリトリーと認識と発話内容について調査を行っている。その結果、3か国のパーソナル・テリトリーの段階性には違いが存在しており、中でも日韓の対先生への言及の場合、図3のような段階性があることを明らかにした。

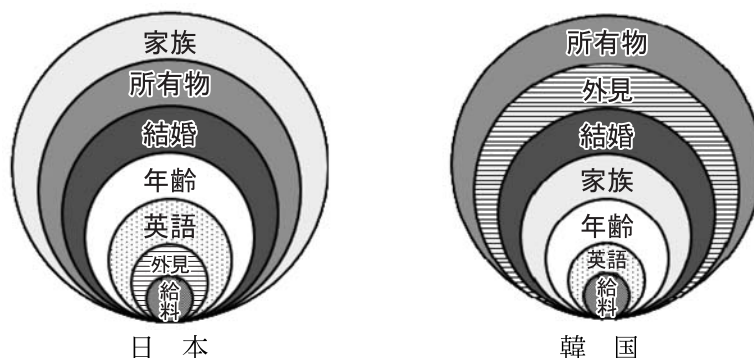


図3 対先生の日本と韓国のパーソナル・テリトリーの段階性

図3で分かるように、日本と韓国で最も違いが顕著な項目は「外見」と「家族」である。「外見」は、日本は中心部の近くに位置しているため言及しにくいのに対して、韓国は周辺部に位置しており、日本より言及しやすいと考えられる。一方、「家族」は、日本は周辺部に位置しており言及しやすいのに対して、韓国は中間部に存在しており、日本より言及しにくく回避される可能性がある。許 (2015) によると、韓国人は先生に対しても外見について言及するという割合が高く、外見についてほめるような内容なら言及するという回答が多数だったことから、目上の人に対する挨拶代わりに外見について言及している可能性が高いと述べている。このパーソナル・テリトリーの段階性に見られる違いは両言語の文法的な特徴の制限や日常生活における表現の違いにも関係していると考えられ、コミュニケーション・スタイルの形成にも影響を与えているのではないと思われる。

さらに、日韓の同年代初対面の場合は、<図4>で示すような段階性があると述べている。日韓で最も大きな違いが見られるのは「出身大学」と「家族」である。日本は「家族」がやや中心部であるのに対して韓国は中間部にあるため、家族の話題は日本のほうが避けられる傾向があると言える。一方、「出身大学」は韓国が中心部であるのに対して日本は中間部であり、韓国のほうが避けられる傾向がある。韓国における出身大学と英語能力は個人の能力を評価する基準の一つとなっており、そのような社会的な背景がパーソナル・

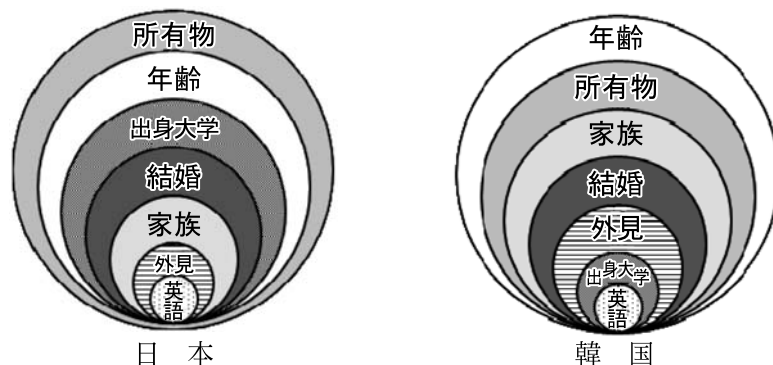


図4 対同年代初対面の日本と韓国のパーソナル・テリトリーの段階性

テリトリーの段階性として表れていると考えられる。

「年齢」と「所有物」は日韓ともに辺部に位置しており、比較的に言及しやすい項目であると言える。特に、韓国の場合、年齢は相手に対して丁寧体を使うか普通体を使うかを判断する重要な要因の一つであるため、若い同年代の初対面の場合は、会話の冒頭で年齢や大学の入学年度を聞くことが多い。両者の年齢が近いか話し手が上だと分かったら、会話を開始した直後でも突然普通体（パンマル）にシフトすることもある。普通体を使用することによって相手との距離を縮め、親近感を示すことで、会話をスムーズに進めようとするのである。それに対して、日本は年齢が近い相手でも、韓国ほど急速にスピーチレベルを変えるのではなく、徐々に距離感を縮めていくのが一般的である。そのため、韓国人との接触場面で、距離感が近すぎたり、突然のスピーチレベルの変更に戸惑いを感じた日本人も多いのだろう（任2006）。

以上のように、日本語の敬語の表現の自然さ、丁寧さは、聞き手との関係や言及する内容も深く関係していることが分かる。また、日本語と韓国語の間にはパーソナル・テリトリーの段階性の相違点は両言語のコミュニケーション・スタイルにも影響している可能性が示唆された。次章では、初対面の日本語母語話者と韓国人学習者が意見を述べる会話で、どのようにパーソナル・テリトリーに関わる内容について言及していたのかを中心に分析を行う。

### 3. 会話に見られるパーソナル・テリトリーへの言及

本章では日本語母語話者と韓国人学習者のコミュニケーション・スタイルの違いを解明すべく、同年代初対面の相手との会話を通して、両者のパーソナル・テリトリーの認識と言及する内容について分析を行う。

まず、分析の対象となった会話データの情報は以下の通りである。

### <会話データ>

- 調査対象：両者は初対面
  - ・日本語母語話者（女性、T大学4年生、23歳）
  - ・韓国人留学生（女性、T大学学部入学前の予備教育生、18歳）<sup>1</sup>
- 韓国人学習者の日本語学習歴；7年10ヶ月（幼児期に日本滞在経験有り）
- 韓国人学習者の日本滞在期間：約2か月半
- 調査時期 2013年12月
- 調査方法
  - ・対面式二者間会話、ビデオカメラによる録画。
  - ・会話調査は日韓、日中、韓中のペアになるように、相手を変えて2回ずつ実施した。本研究の分析対象の会話データは両者ともに2回目に実施した会話調査である。
  - ・会話収録後に別々の場所で、フェイスシートの記入、相手や会話の評価及び印象についてアンケート調査を実施。
- 会話時間：35分45秒
- 会話のテーマ：日本事情について指定された7つのテーマから一つを選んで意見交換を行う。意見交換を行うテーマは、与えられたリストから話し合いで一つを選ぶか、くじ引きで選ぶか、両者の相談のうえで決定する。今回の分析対象となったペアはリスト見て話し合いで決めている。テーマは、外見は重要であるかどうかであり、まずは自己紹介を行った後、意見交換を行っていた。

### 3.1 両者の会話の特徴

会話データを分析した結果、両者には会話開始直後から、会話の展開の仕方において大きな違いがあることが明らかになった。日本語母語話者（以下、J）は調査協力者として与えられたタスクを遂行しようという意識が強く、会話の全体においてタスクを達成するための発話が見られた。また、会話が順調に進むように聞き手である韓国人学習者（以下、K）に対する配慮が見られ、テーマの決定権をKに委ねたり、Kに対して発話を促したりするシーンが随所に見られた（会話例1）。<会話1>の82ではJがKにトピックの決定を委ねようとしており、88、90ではKの提案を受け入れる意思表示、さらに94ではKの再度の提案に対して賛同しており、Kに対する配慮が見られる。

#### <会話例1> 0:02:33

- 82 J：なんにします？（テーマが書かれているくじを見る）
- 83 K：あー、そうですね。
- 84 J：うん。



- 85 K : 5 番とかどうですか。  
86 J : 5 番何ですか。  
87 K : (笑い) (くじの 1 枚をJに渡す)  
→ 88 J : (笑い) だいじ…いいですね、5 番。(笑い)  
89 K : (笑い) がいけーん  
→ 90 J : じゃあ 5 番に、5 番にしますか？  
91 K : はい。6 番も、ほとんど  
92 J : 6 番？  
93 K : 同じだと思いますけど。  
→ 94 J : ああー美容整形。  
95 K : 韓国すごい多いです (よ)。

Kは相手との会話が途切れることがないように、次々と会話の話題を変えたり、聞き手に質問を投げかけたりしながら、早いペースで会話を進行させていた。〈会話 1〉の85、91のように、Kは会話の流れの中で頻繁に話題の交替や新たな提案を行っている。このような両者のコミュニケーション・スタイルは会話全体を通して表れ、Kは質問する側、Jは答える側に立っているシーンが多く見られた。

また、Kの発言の内容にはJの個人情報やプライバシーに関わる内容が含まれていることが多かった。次の〈会話例 2〉は会話開始25秒後に行った会話で、KがJの身分について質問し、その後もJの外見についてコメントしており、両者の外見について話題が続いている例である。

〈会話例 2〉 0 : 00 : 25

- 12 K : 今、大学生なんですか。  
13 J : そうです。T (大学名) の、K (所属学科) の 4 年生です。  
→ 14 K : あー、4 年生ですか。  
15 J : はい。  
16 K : でも…  
17 J : ん？  
→ 18 K : ずいぶん若く見えて。  
19 J : いやー (笑い)  
→ 20 K : 私と同じ  
21 J : いやー  
→ 22 K : ぐらいかなって思いました。

23 J : いや、若く見えるというか、これは幼く見えるのであってー

24 K : (笑い) えーえー。

→ 25 J : 今、すっぴんなんですよ。ちょっと…。

12でKが「大学生なんですか」と属性について質問し、14で「4年生ですか」と確認する質問が続く。さらに、18で「ずいぶん若く見えて」と外見について触れ、20、22で自分と関連付けて相手の外見についてコメントを付け加えている。JもKの発話に呼応し、25で「すっぴんですよ」と自分の外見について開示するような会話に展開している。初対面の両者の会話であるにも関わらず、開始直後にKから「所属」「外見」に関する質問やコメントが出ており、この後も家賃、アルバイトの時給、就職先、実家など様々な質問が続いている。

韓国人の場合、同年代の相手に対してスピーチレベルを決めるために、年齢に関する質問が多いが、〈会話2〉でもKがJに対して年齢を確認する質問が出ている。今回の会話データは、JとKの両者ともに2回目の会話調査であるが、Jは1回目の中国人学習者との会話で自分の年齢について「二十ほにやらです」と述べており、開示を避ける場面がある。Jは自分の年齢などの個人情報に関する内容の開示は避けたいと考えていたようである。Jのほうから先に個人情報について触れることなく、Kに対して先に質問する場面は少ないことからJの会話の進め方が推測できる。しかし、今回の調査では会話の冒頭で、KがJの学年と外見について質問したりコメントしたりしている。それに対して、Jは17、19、21のように「ん?」「いやー」のように戸惑いを見せつつも、23、25のように自然に年齢と外見について会話が展開していく。

今回の会話調査は初対面同士であり、両者は会話が終了するまで丁寧体を使用しているため、一般的に普通体による会話より発話内容や表現形式に制限が多い。その制限に触れる場合は、不自然な表現になったり、相手に不快感を与えたりする恐れもある。次節では、前章で述べた角田の「所有傾斜」、鈴木「聞き手の私的領域」、許の「パーソナル・テリトリー」に照らし合わせ、発話内容について考察を行う。

### 3.2 所有傾斜に関わる言及

JとKは会話の進め方は異なるものの、〈会話例1〉と〈会話例2〉で分かるように両者ともに活発に発言しており、発話量に大きな差は見られなかった。しかし、話題の選定や発話内容には違いが見られた。まず、両者の発話の中で相手の所有物について言及した内容について角田(2009)の「所有傾斜」をもとに、所有傾斜の高いものから低いものへと、順番に示すと、表1のようになる。

表 1 所有傾斜とJとKの発話内容


所有傾斜		所有物	Kの言及の内容	Jの言及の内容
		身体部分		
		属性	大学生(身分)、4年生(身分)、 サークルでの活動(経験)	
		衣類		
		(親類)	お姉さんの結婚(親類)	
		愛玩動物		
		作品		
		その他の所有物	若く見える(外見)、彼氏の有無、 彼氏との連絡の頻度、彼氏の所属、 彼氏の学年、彼氏の出会い、彼氏 との馴れ初め、彼氏の性格、実家、 住まい、アルバイトの時給、家賃、 方言、就職活動、就職先、卒業後 の進路、所属大学のランク、高校 の成績、彼氏との交際期間、	

表1で示したように、JとKが相手の所有物について言及した内容の違いは一目瞭然である。KはJの属性(所属や身分)、親類(お姉さんの結婚)への言及だけではなく、その他の所有物についても彼氏の有無、彼氏との出会いや馴れ初めなど、様々な内容の発話と質問を繰り返している。一方、JからはKの所有傾斜に関わる内容の言及は一切見られず、Kの発話に同意を示したり相槌を打ったりする形で会話を進めていた。JはKの言及する内容や質問に対して誠実に答えている(会話例3)シーンが多かったが、彼氏との交際については困惑したり、言及を回避するような場面も見られた(会話例4)。

<会話例3> 0:10:39

- 362 K:ここ、同じ大学の人ですか?
- 363 J:そう、(大学名)の人です。(学科名の一部)の
- 364 K:あー、
- 365 J:(学会名の一部)の…
- 366 K:おう。
- 367 J:なんか研究が忙しいらしくてかまってくれないん(笑い)
- 368 K:(笑い)4年生ですか。
- 369 J:そう、4年生。
- 370 K:あー。えー、だ、だったら、なんか部活とかで出会ったんですか。
- 371 J:あーそうですね、サークルで会って。でもね、

- 372 K : (お姉さん) どんなサークルし (た) んですか。
- 373 J : なんか園芸クラブって言って、畑耕す、
- 374 K : 畑耕す？
- 375 J : そう、野菜作ったり、
- 376 K : あー
- 377 J : 花を作ったりするサークルだったんですけど、そう、そこにいたんですよ…  
二人とも。
- 378 K : おもしろいんですか、そのサークル。
- 379 J : まあ、そんな、おもしろいっていうか普通ですけど。

KがJの彼氏について、専門や二人の出会いなど質問が続き、Jは363、365、369、371のように、応答しながら会話を進行させている。しかし、この後、さらにJの彼氏の話が続くが、次の〈会話例4〉では444、446、456のように少し戸惑いを見せる場面もあった。

〈会話例4〉 0:12:52

- 437 K : ふーん。あーじゃ、その彼氏とは1年生の時に会ったん…。
- 438 J : まあそうですね。あまり外見について見 (慣) れた覚えもないんですけどね。
- 439 K : あー。あ、すごいいい人。
- 440 J : いい人 (笑い)。
- 441 K : 外見見ない人はいい人です。
- 442 J : (笑い)
- 443 K : (笑い) 性格見るってことですから。
- 444 J : そうですねー
- 445 K : な、
- 446 J : うん。まあ別に向こうもそんな私の顔で好きになったわけじゃないんで。
- 447 K : へー。
- 448 J : や、なんか、すごい、マッチ棒みたいな。  
(中略)
- 453 K : あーどんな性格で好きになったんですか。
- 454 J : えー
- 455 K : どんな性格…
- 456 J : なんか、うん、言うの恥ずかしい (笑い)。
- 457 K : 優しい
- 458 J : えー、やー、まあ優しいですけど、真面目、なところがいいなーと思って。
- 459 K : はー。

<会話4>のKの「(Jの) 彼氏」に関する継続した質問に対して、438、444のように応答しているが、Kの453の「(彼氏の) どんな性格で好きになったんですか」の質問に対しては454で躊躇を示し、456で「言うの、恥ずかしい」と応答を避けている。しかし、Kはさらに457で「優しい」と応答を求めており、それに対してJは458のようにコメントしているが、言いよどみが見られる。

以上のような発話から、Jは自分のプライバシーである「彼氏」について言及を躊躇したり避けようとしていることが分かる。一方、KはJに彼氏がいることを知った後は彼氏に対する質問やコメントが続いており、共通の話題にしようとする意図が見られる。つまり、JとKの間には個人の間際に対するパーソナル・テリトリーの認識の違いがあり、話題の選択や会話の進め方の違いとして表れていると思われる。

### 3.3 私的領域に関わる言及

本節では、鈴木 (1997) の「聞き手の私的領域」に基づいて両者の言及した内容について分析を行う。前章で述べたように、丁寧体世界で丁寧さを保つためには聞き手の私的領域 (聞き手の欲求、願望、意志、感情、意思、感覚) に関わる内容については言及を避けるべきである。しかし、今回の会話調査ではKがJの私的領域に関わる内容について言及する場面が多く見られた。

本節では聞き手の「感情」について言及する部分の会話を分析する (会話例5)。

<会話例5> 0:27:15

- 891 K: あ、だったら卒業したら大阪に帰るんですか。  
892 J: なんですね。  
893 K: もうすぐ卒業じゃないですか～。  
894 J: (笑い) もうすぐ…3ヶ月  
895 K: (笑い) で遠距離になっちゃいますね。  
896 J: (笑い) なっちゃいますね。  
897 K: えー。  
898 J: まあーまあまあ…。  
→ 899 K: 遠距離、寂しいですよ。  
900 J: そうですね。  
→ 901 K: つらいですよ。  
902 J: (笑い)  
→ 903 K: わー。  
904 J: まあ、仕方ないです。

<会話例 5>はKがJの大学卒業後の進路について質問し、就職先のことを知った後、交際中の彼氏との関係についてコメントしている場面である。Kが899のように「寂しいですよ」とJの感情に触れており、Jはいったん「そうですね」と同意している。しかし、さらにKが901のように「つらいですよ」と踏み込んだことに対して、Jは笑うだけで応答を避けている。その後さらに、Kは903のように「わー」と自身の感情を移入しているが、それに対してJは904で「まあ、仕方ないです」と言い切ることによって会話を収束させている。KはJの遠距離恋愛や感情について話題を広げようとしているが、Jは話題を終了させていることが分かる。

<会話例 5>は今回の会話調査の後半部分であり、Kの発話には普通体も混ざるようになってきていることから、親近感を持つようになってきていることが分かる。KはJのパーソナル・テリトリーに踏み込みながら距離感を縮めてきており、前節の<会話例 3>の371でも分かるように、Jを「お姉さん」と呼んで親しみを表していた。韓国では親しみを感ずる目上の相手に対して、家族の呼称である「언니/eonni/ (お姉さん)」や「오빠/obpa/ (お兄さん)」と呼んで、親しみを表すことが多い。KのJに対する親近感が呼称や発話内容に表れているものと思われる。

KはJに対して親しみの現れとして感情や感覚に触れているが、Jは自分の私的領域に触れられたと感じており、<会話 5>のように言い切りの形で会話を終了させたのではないかと思われる。両者の私的領域に関する認識のずれが垣間見えた会話であると言える。

### 3.4 パーソナル・テリトリーに関わる言及

日韓の対同年代のパーソナル・テリトリーの認識の段階性については前章の<図 4>で述べた通りである。韓国では学歴社会の背景があって出身大学はもちろん、個人の学力や学歴、能力に関する質問や言及は失礼になることが多い。しかし、今回の調査では、KがJの所属している大学のレベルやランキングについて質問する場面があった（会話例 6）。さらに、Jの出身高校のレベルや成績に関連する質問も出ており（会話例 7）、Jが戸惑いを見せる発話が見られた。

<会話例 6> 0:28:05

→ 921 K: は一。(所属している大学名) ってけっこういい大学なんですか。

922 J: あ一、多分、いい大学、のほうですよ。

923 K: は一。

→ 924 J: う、上のほう。そんなあんまり思ったことないですけど。

925 K: (笑い) 何番目ぐらいなんですか。

→ 926 J: 何番目? えーっ

927 K : 知ってますか。

< 会話例 7 > 0 : 29 : 52

959 K : すごい高校の中でトップにいたんじゃないですか。

→ 960 J : いやーそんな。滅相もないですよ。全然ですよ全然。

961 K : (笑い)

962 J : 私の大学、じゃなくて高校は、なんかみんな京大とか阪大とか行く子もいて。

963 K : えー。

964 J : 私は (大学名) だからちょっと、普通の、真ん中ぐらいのグループ。

→ 965 K : えーどんな高校

966 J : (笑い)

→ 967 K : だったんですか、すごい高校じゃないですか。

968 J : えーいやあ。

< 会話例 7 > のような成績や大学のランキングに関する発話は、一般的に韓国人同士の会話では回避される内容である。韓国人同士で同じ社会背景を持っている相手に対しては言及を避ける話題であっても、今回の会話調査のような接触場面では話題にしていることが分かった。Kは今後Jと同じ大学に進学する予定であることから、大学のランキングは共通の話題と感じており、さらに出身高校や成績についても一歩踏み込んだ発話をしていると思われる。しかし、Jにとっては予想外の話題であり、924、926で見られるような戸惑いや、960のような強い否定の形で応答している。それに対してKはさらに、965、967のように相手の能力について言及しており、パーソナル・テリトリーの中心部の内容について踏み込んだ発話をしている。Jは、966のような笑い、968のような否定表現を使うことによって、応答を回避している。

その他にも、KはJのパーソナル・テリトリーに関わる内容について言及が多く見られた。例えば、Jの住まいや家賃、アルバイトの時給などについても言及している。Kの質問の内容は、前章の表1で示したような聞き手の所有物やパーソナル・テリトリーに関わるものが多いが、その他にもコンタクトレンズの値段や眼科の診察費、関西の有名な場所や名物、アルバイトの平均時給など、多岐にわたっている。KはJのパーソナル・テリトリーに踏み込みつつも、多様な話題を取り上げることによって、巧みに会話を進め、初対面の相手に対する配慮の気持ちを伝えていたのではないと思われる。KはJより年齢が下であり、留学生の立場であることから、大学事情などの両者の共通の話題を取り上げつつ、私的領域やパーソナル・テリトリーに少しずつ踏み込みながら距離感を縮めようとしていたと思われる。

それに対して、JはKのパーソナル・テリトリーに踏み込むこともなく、Kの質問に対しては誠実に応答し、時には自己開示をしていた。しかし、Kの踏み込んだ質問や発話に対して応答を避けたり躊躇する場面も多く見られたことから、Kの発話内容については予想できなかったものが多かったと思われる。つまり、両者のパーソナル・テリトリーに関する認識には違いがあり、コミュニケーション・スタイルや会話の進め方、応答の仕方にも違いとして現れたのではないかと思われる。

許 (2009) では、韓国語母語話者が目上である先生に対しても外見について触れたり、相手の病状や感情について言及したりするケースがあると指摘している。相手に自分の気持ちや感じたことを伝えて親しみを表すとともに、聞き手と共有感を作るためである。しかし、相手が同じような認識を持っていない場合は、一方的にパーソナル・テリトリーに踏み込まれたと感じる可能性があり、誤解を招きかねない。韓国人学生が日本語母語話者とコミュニケーションを行う際には注意が必要であると言える。

#### 4. おわりに

本研究では、若い同年代の初対面の会話データを分析し、どのような内容について言及するかを中心に分析を行った。その結果、韓国人学習者のほうに相手のパーソナル・テリトリーに関わる発話や質問が多く見られ、日本人にはパーソナル・テリトリーに関わる言及は一切見られなかった。韓国人学習者の場合、パーソナル・テリトリーに関わる内容だけでなく、両者に共通する内容の質問も多く出ており、相手に対する配慮の一面も見られた。一方、日本人は韓国人学習者のパーソナル・テリトリーに踏み込んだ言及に戸惑ったり、笑いで応答を回避したり、話題を収束させたりするシーンが何度も見られた。

今回の会話調査後に実施したアンケート調査では相手に対する印象や会話の評価などについて質問しているが、両者ともに相手に良い印象を持っていることが分かった。韓国人学習者の高い日本語力と巧みな質問や自己開示によって、日本人は不愉快に思うことはなく、両者間に摩擦は起こらなかった。しかし、本会話調査で見られた韓国人学習者のコミュニケーション・スタイルは、場合によっては質問攻めのように感じられて誤解を招いたり、円滑なコミュニケーション活動を妨げたりする可能性もある。

日本語教育の現場における発話の内容や表現形式に関する指導法について、今後の課題としたい。

#### 付記

本研究は平成26年度～平成28年度科学研究費助成金（基盤研究 (C)、研究課題：パーソナル・テリトリーの認識と発話スタイルに関する日米韓中の対照研究、課題番号23520610、研究代表者：許明子）による研究成果の一部である。



## 注

1. 調査協力者に対して、調査の目的、個人情報の保護について詳細を説明し、会話データの内容及び日本語の表現を研究の分析データとして利用することについて同意、承諾書を得ている。
2. 会話の中の下線は各会話例で注目する発話内容を示す。

## 参考文献

- 任栄哲 (2006) 「韓国人とのコミュニケーション」『韓国人による日本社会言語学研究』 おうふう：7-19
- 尾崎明人 (1998) 「異文化接触場面のコミュニケーション研究と日本語教育」日本語教育通信日本語・日本語教育を研究する、国際交流基金
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と主観性』くろしお出版
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 許明子 (2009) 「공유감을 만드는 한국어, 거리감을 두는 일본어」『언어표현을 통해서 본 한일문화』韓国日語日文学会、J&C出版社：277-293
- (2010a) 「日本語と韓国語の聞き手の私的領域に関する言語行動—韓国人日本語学習者と日本語母語話者の言語行動に関する調査を通して—」『地域研究』第31号、筑波大学人文社会科学研究科：25-44
- (2010b) 「日韓対照研究と日本語教育—話し手と聞き手との関係から見た日本語と韓国語の言語行動について—」『日本語教育研究への招待』くろしお出版：273-288
- (2011) 「聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる談話分析—日本人・韓国人・中国人母語話者の調査を通して—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第26号、筑波大学留学生センター：1-17
- (2012) 「パーソナル・テリトリーに関わる発話の日韓中対照研究」日本語教育学会世界大会発表要旨
- (2015) 「パーソナル・テリトリーにかかわる発話に関する日韓中対照研究—言及の有無に関する分析を通して—」『パーソナル・テリトリーとボライトネス・ストラテジーに関する日韓中対照研究』平成23年度～平成26年度科学研究助成金、基盤研究 (C) 研究成果報告書 (課題番号：23520610、研究代表者：許明子)、筑波大学